OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	いわゆるウィトゲンシュタインの「世界像命題」をめぐって
Author(s)	奥, 雅博
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2004, 30, p. 78-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10629
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「大阪大学大学院人間科学研究科紀要」第30巻, 2004年 3 月所収

いわゆるウィトゲンシュタインの「世界像命題」をめぐって

奥　　雅　博

いわゆるウィトゲンシュタインの「世界像命題」をめぐって[1)]

奥　雅博[(1)]

1．問題の所在

ウィトゲンシュタインのいわゆる「世界像命題」をめぐる議論とは、彼の最晩年の覚え書きを編集した『確実性について』の93節以下に端を発する議論である。周知の通り『確実性について』に収められた覚え書きは、彼がマルコムの招待によりアメリカを訪問しその帰国後、恐らく1949年のクリスマス頃に書き始められたものから、1951年４月27日、即ち死の２日前にまで亘るものである。「世界像命題」をめぐる議論で理解されているウィトゲンシュタインは、ムーアを手がかりにしつつ、当の命題の反対が考えられないという意味で我々の世界像の根本となる命題の存在を考え、他方この「世界像命題」といえども、時に応じ多少の修正は施される、しかしながらそれぞれの時点では基盤となる命題として経験命題とは区別される、と主張したものとされる。この文脈で受け取られる限り、1951年という時期もあり、クワインの「経験主義の二つのドグマ」にみられる科学理論の改訂可能性を含むラジカルな全体論との対比で多くの議論を呼んだものである[2)]。

以下この論文で私は次のようなやや大胆な主張を展開したい。第一に、ウィトゲンシュタイン自身は「世界像命題」の存在を積極的に主張してはいない。第二に、覚え書きから引き出される「世界像命題」の候補者の多くは、経験的に誤りであるか、ウィトゲンシュタインの無知・無学を露呈するものであって、とても「科学の基礎的命題」たりえない。第三に、『確実性について』とそれ以前の時期との関係である。渡米中のマルコムからの刺激によって、ウィトゲンシュタインがムーアに対する関心をかき立てられたとする通説は誤りである。第２次世界大戦後から1949年７月の渡米以前にもウィトゲンシュタインのムーアへの関心は持続していたのであって、『心理学の哲学第１部』（1947年）、『心理学の哲学第２部』（1948年）、『最終草稿第１部』（1948年２月−49年５月）、要するに『哲学探究第２部』の元原稿を書いた時期の内容と『確実性について』の内容とに断絶は認められない。一例を挙げるならば、『哲学探究』第Ⅱ部ブラックウェル版221ページ以下では、「私には二本の手がある」という命題が取り上げられ、「地球には100万年の歴史がある」という主張と、これに対立する「地球は５分前に誕生した」という主張との関係が論じられている[3)]。

他方、『確実性について』に含まれる考察とそれ以前の時期の考察との連続性を強調

(1) 大阪大学大学院人間科学研究科（基礎人間科学講座 科学基礎論研究分野）

するとすれば、おそらく次のような反論が予想される。即ち、『確実性について』には何ら新たな洞察は存在しないのか、これまでの洞察の二番煎じを最晩年の一年半弱の闘病中に記したにすぎないのか、と。この問いについては、別の原稿を準備中であるが、ここではこの期間全体の主張を一枚岩とみなせるか否か、と問題を提起するにとどめ、そして「世界像」という表現自身が登場するのは262節が最後であることに注意を促しておきたい。

ひとまず、「世界像」という表現が登場する箇所を提示することから始めたい。

2．テキストの提示

ところで、「世界像命題」という表現がいわば複合語としてウィトゲンシュタインのテキストに登場することはない。これは、『確実性について』の95節の一箇所で「世界像を記述する諸命題」とある表現を日本語で短縮したものである。また、「世界像」（Weltbild, 英訳は picture of the world, world-picture を適宜使い分けている）という表現も、676の節に編集されている『確実性について』のなかで93－95節、162節、167節、233節、262節に登場するのがその全てである[4)]。それ故、ひとまずコメント抜きでテキストを提示したい。

93節　ムーアが知っていることをあらわす命題は全て、人がその反対を信じるための理由を想像しがたい類のものである。例えば、ムーアが彼の生涯に亘って地球から殆ど離れることなく過ごしてきた、という命題である。――ここでもまたムーアに代わって私自身についてこれを言うことができる。このことの反対を私に信じさせるようにするものがあるとすればそれは何であろうか。記憶か、それとも私がそのように聞かされたかである。――私がこれまで見たり聞いたりした全てのことから、人間は誰一人としてこれまで地球からはるか遠く離れたことはない、と私は確信している。私の世界像のうちにある何者も、この反対に与することはない。

94節　しかし私が自分の世界像を持つのは、その正しさを確信したからでもなければ、確信させられたからでもない。それが、私が真と偽とを区別するための伝承された背景だからである。

95節　この世界像を記述する諸命題があるとすれば、それらは一種の神話に属することであろう。そしてその規則はゲームの規則に似ており、人はこのゲームを純粋に実践的にも、即ち明言された規則なしに、学ぶことができる。

162節　例えば地理学の教科書に記されていることを、私は一般に真とみなしている。何故か？これらの事実は全て何百回となく確認されているからだ、と私は言う。だがどうやって私はそのことを知っているのか。それに対する私の証拠は何なのか。

私はある世界像を持っているのだ。それは真なのか偽なのか。それは何よりもまず私の探究や主張の基底をなしている。それを記述する命題は全てが一様にチェックに付されるわけではない。

167節　我々の経験命題の全てが同じ身分を持つわけではないことは明らかである。というのも、そのような命題のあるものを固定し、それを経験命題から記述のための規範に代えることが可能だからである。

化学の研究を考えてみよう。ラボアジエが彼の実験室で様々な物質で実験を行い、そして燃焼に際してこれこれのことが生じる、と結論する。彼は、別な時には別なことが生じるかもしれない、とは言わない。彼はある特定の世界像を把握しており、しかもそれは彼が考案したものでは勿論なく、彼が子供時代に学んだものである。私がそれを世界像と呼び仮説と言わないのは、それが彼の探究の自明な基礎をなしており、しかもそのようなものとして明言されもしないからである。

233節　ある子供が私に、地球は私が生まれる前からあったのか、と尋ねたとしたら、私は彼に、地球は私の誕生と共に初めて存在したのではなく、それ以前のずっと昔から存在したのだ、と答えるであろう。その折に私は、何か滑稽なことを話している、という感じを持つであろう。例えば、子供が、これこれの山はそこに見えている高い家よりももっと高いのか、と尋ねた場合のような。私が世界像をまず教え込んだ者に対してのみ、私はあの問いに答えられるかのようである。

ところで私がこの問いに確信を持って答える時、私のこの確信はどこから来るのだろうか。

262節　私は、全く特殊な環境の下で成育され、地球は50年前に誕生したと教え込まれ、その結果それを信じている人を、想像可能である。我々はこの人に、地球はずっと以前から存在している、と教え込むことができるかもしれない。――我々は彼に、我々の世界像を伝えようと努めることになる。

このことがなされるとすれば、それはある種の「説得」の形をとるであろう。

以上がテキストの全てである。

3．ウィトゲンシュタイン vs クワインという図式は クワインをベースとしたウィトゲンシュタインの受容である

これだけのテキストから、何故ウィトゲンシュタインの「世界像」が云々され、クワインの全体論的科学論との対比が耳目を集めたのであろうか。二つの理由を挙げるとすれば、クワインを準拠枠としてウィトゲンシュタインが受容されたことであり、もう一つは96節以下の記述がクワインとの連想をかきたてた点にある。

今となっては見過ごされがちなことであるが、ウィトゲンシュタインと面識のあった少数の哲学者を除けば、文字の世界では後期ウィトゲンシュタインよりクワインの方がはるかに「先輩」である。ウィトゲンシュタインは1951年に死んだが後期の思索は生前には出版されなかった。他方この年にクワインの論文「経験主義の二つのドグマ」が公表されている。1953年にウィトゲンシュタインの『哲学探究』が遺稿として初めて公刊されるが、この年に「ドグマ」を含むクワインの論文集『論理学的観点から』が出版される。その後ウィトゲンシュタインの遺稿は順不同に出版され、『確実性について』が出版されるのは1969年であり、この時期までにクワインの『言葉と物』『存在論的相対性』は既に出版されていたのである。つまり、クワインの方がはるかに先に読まれており、ウィトゲンシュタインの「新奇性」に富んだ思想は受容されてきていたが、読者は刊行される遺稿の一冊毎に意味付けを与えようと腐心していたわけである。

この状況下で、「世界像」という耳あたりの良い表現とそれに続く96節以下の覚え書きがクワインとウィトゲンシュタインの比較を誘発することとなった。96節以下をみてみよう。

> 96節　経験命題の形をした或る命題が凝固する、そして凝固していないで流動的な経験命題に対して、流れを導く導管の役割を果たす、と想像することも可能であろう。そして時代と共に流動的な命題が凝固し固定した命題が流動的になることによって、この関係も変化するのである。
>
> 97節　神話が再び流動的となり、思想の河床に位置のずれが生じることがあり得る。しかし私は河床のうちでの水の動きと河床のずれとを区別する。尤も両者の明確な区分は存在しないが。
>
> 98節　しかし人が、「それでは論理学も経験科学なのだ。」と言ったとすれば、彼は誤っている。しかし次のことは正しい。即ち、同じ命題がある時は経験によってチェックされるものとして、ある時にはチェックのための規則として、扱われることがあり得るのである。

なるほど、ここでは論理学や数学を含めた科学理論の改訂可能性の問題が論じられている、この点でクワインの全体論と類似している、ただ両者の違いはクワインの全体論が茫漠としているのに対し、ウィトゲンシュタインは、経験命題と「世界像を記述する命題」とはその都度区別すべきである、と主張する、――このような印象が広く生じたのである。

しかしながら、「世界像」をめぐるウィトゲンシュタインの覚え書きは「科学理論」としては粗雑であり、他方、これらの覚え書きに登場するアイデアも何ら『確実性について』で初めて登場するものでもない。これが私の次の論点である。

4．世界像をめぐるウィトゲンシュタインのコメントは「科学論」として耐え得るものではない

先の167節第２段落のラボアジエについてのコメントを考えてみよう。ウィトゲンシュタインによれば、ラボアジエは燃焼に関する酸素説の創始者ではなく、子供の時に学んだ酸素説を踏襲しているにすぎず、酸素説を明瞭に定式化することもなかった、という話になる。これでは化学史に関する基本的な誤りないし無知としか言いようがない。

月世界旅行に関しては次のような噴飯ものの覚え書きが存在する。即ち

> 108節　「だがそうすると客観的真理は存在しないのか。誰かが月に行ったかどうかということは、真か偽ではないのか。」もし我々が我々の体系で考えるなら、これまでどの人間も月に行ったことがない、というのは確実である。そのようなことがまともな人間から真面目に報告されたことが決してない、というだけでなく、我々の物理学の全体系がそれを信じることを禁止しているのである。というのも物理学は、「どうやって重力に打ち勝つのか」「どうやって彼は大気のないところで生きることができるのか」という問いへの答えを要求し、それ以外に何千もの答えられない問いをつきつけるからである。だが、これらの全ての問いに答えずに、次のように応答されたとしたらどうであろうか。「どのようにして月に人がたどりつけるかわかんないよ、でも人が月にたどり着いたら、ああ、月にいるのだ、とすぐわかるじゃない。君だって全部が説明できるわけではないでしょう。」と。このように答える人がいたら、我々は彼を我々から精神的に非常に隔たっている、と感じることであろう。

1950年には人類が月に到達していないこと、竹取物語は非現実のおとぎ話であること、このことが示されているだけではない。1950年当時の物理学が月世界旅行の不可能性を含意していること、物理学の革命という世界像の変転があって初めて月世界旅行が可能なこと、ウィトゲンシュタインはこう主張しているのだ。彼が物理学を理解していないか、この分野で想像力が乏しかったことは疑いがない。彼がまずはじめに航空工学を志した、というのは大きな皮肉である[5)]。

5．『確実性について』で初めて登場するアイデアは、むしろごくわずかである

ウィトゲンシュタインがマルコムの招待でアメリカ滞在中にムーアへの関心をかきたてられた、というのは有名なエピソードである。しかしこのことは、ウィトゲンシュタインがムーアをこれ以後初めて読んだ、という意味ではない。それ以前にもウィトゲンシュタインはムーアを良く読んでおり、ムーアの論点へのコメントとみなせる議論が数

多く存在する。『確実性について』で初めて登場するアイデアは、月世界旅行などむしろごく少数である。

例えば、『哲学探究』第Ⅱ部11章（ブラックウェル版221ページ、第５、第６セクション）には次の記述がある。即ち

> 私に手が二本あると改めて確信できるような場合が想像可能である。他方、普通なら、確信などあり得ない。「だが、君は目の前に手をかざしさえすればよいのだ。」――今私が自分に手が二本あることを疑うなら、私は自分の目を信頼する必要もなくなるのだ。（友人に尋ねてもよいことになるだろう。）
>
> このことは、例えば「地球は何百万年も前から存在している」という文の方が「地球はついこの五分前から存在している」という文より明瞭な意味を持っていることと関連している。というのも、後の文を主張する人に対して私は次のように尋ねるであろうから。「この文はどのような観察に関係しており、この文と抵触する観察はどのようなものだろうか。」と。はじめの文については、私はそれがどのような思考の範囲に属し、どのような観察に属しているかを知っているからである。

即ち、『確実性について』の主要な論点が既に先取りされているのである。

93－97節の河床と流水の比喩が示す「理論の交代可能性」も『確実性について』で初めて登場する議論ではない。『哲学探究』353節は「基準と兆候の間で文法が動揺することが、およそ兆候しか存在しないかのような外見を生じる」という一文で始まり、ある時期には兆候とみなされた命題が別な時期には定義的基準とされ、またその逆もあることが認められている。「科学理論」の交代可能性についても前例がある。『哲学探究』23節で言語ゲームの多様性について論じた時、ウィトゲンシュタインは数学のはやりすたりに言及しており、79節ではより直截に、「科学の定義の動揺、今日現象 A の経験的随伴現象とされたものが、明日は「A」の定義となる。」と述べられている[6)]。

さらに、直前の92節で言及されている奇妙な世界像を持つ王様の矯正可能性も新しい話題ではない。まず引用すると

> 92節　ところで、「人は、地球がつい最近、例えば彼の誕生と共に存在し始めた、と信じる尤もな理由を持つことがあり得ないか。」と問うことが可能である。――彼がいつもそのように聞かされていた、と想定すれば、彼にはそのことを疑う適切な理由があるだろうか。人間は雨を降らすことができると信じていた。何故ある王様が、世界は彼と共に始まった、という信念の下で教育されることがないというのか。そして、ムーアとこの王様が出会って議論した場合、ムーアは自分の信念を正しいものとして本当に証明できるであろうか。ムーアが王様をムーアの見解へと改宗させることができない、と私は言うのではない。だがそうすると、それは特殊な種類の改宗であろう。王様は世界を違った仕方で見るようにされることであろう。

ある見解の正しさについて、その見解の単純さやシンメトリーによって確信させられる、即ち、この見解へ移行することになる、このようなことがときにある、このことを考えてみよう。その場合、人はただ「こうでなければならない」と言ったりするのである。

これの先例とみなせるのは『哲学的考察』58節の議論である。そこでは、オリエントの専制君主かウィトゲンシュタインのみが、「自分は歯が痛い」と言うことができる特権的地位を占め、他の人々については、「特権的な人が歯が痛い時と同じ振る舞いをする」という表現を用いる言語共同体が検討されている。

科学理論の交代可能性や「世界像」の列挙が『確実性について』の主題でもなければ、『確実性について』で新たに登場する論点が沢山あるわけでもないことについては、これで十分であろう。それでは、『確実性について』の主題は何なのか。「地球から遠く離れたことがない」を手がかりに、今少し考えてみることにしたい。

6.「ウィトゲンシュタインが地表から遠く離れたことがない」という主張の論点は何か

月世界旅行が理論的に不可能である、という噴飯ものの主張を別とすれば、「地表から遠く離れたことがない」という点では、ウィトゲンシュタインとムーアは同じ文明に属している。この点に関してはムーアと同じことをウィトゲンシュタインも主張可能である（『確実性について』93節）。即ち、飛行が可能で実用化されており、この可能性を疑う人々は野蛮人であり、他方、飛行は日常茶飯ではなく、飛行体験はそれぞれの個人史に記録され、その反対を想定することが困難である、という文明に属している。二三引用すると

132節　人々は、王様が雨を降らせることができる、と判断した。「我々」は、それがあらゆる経験と矛盾する、と語る。飛行機、ラジオ等が諸民族を接近させ文化を伝播する手段であると、今日人々は判断している。

671節　私がここから世界のある場所へ飛行機で赴き、その場所には飛行の可能性について不確実な情報しか持たない、あるいは全く情報を持たない人々がいるとしよう。私は彼等に、丁度今飛行機で到着した、と語る。彼等は私に、私が間違っていることはあり得ないか、と尋ねる。――彼等は物事の進み方について、明らかに間違った考えを持っているのだ。（もし私が箱詰めにされていれば、輸送手段について私が間違うことがあり得るというわけだ。）私が彼等に、自分は間違うことがあり得ない、と言うだけなら、彼等はあるいは得心しないであろう。しかし、私が経過を描写するならば、得心するかもしれない。この場合、彼等が誤謬の可能性を

問題にすることは確かにないであろう。しかしその場合、――彼等が私を信頼したとしても――私が夢を見た、私が魔法にかけられた、と信じる可能性はあるのである。

675節　ある人が、自分は数日前にアメリカからイギリスまで飛行機で帰ってきた、と信じる場合、彼はこの点では誤ることがあり得ない、と私は信じる。

彼が、自分は今机に向かって座り、書き物をしている、と語る場合も同様である。

ウィトゲンシュタインとムーアが飛行機に乗ったことがないので、地表から殆ど離れたことがない、というのは、個人史レベルの話となり、ある時代・文明が共有する常識とは言えなくなりそうである。航空機の利用が日常茶飯となり、乗務員のスケジュールが苛酷となった今日では、一週間前にどのフライトに乗務したかは、記録を見て初めて思い出す、ということも十分あり得る話であろう。

もとより、ムーアのような意味で自分が知っている命題を枚挙できる、このような形で世界像を固定できる、とウィトゲンシュタインは考えていない（6節を参照）。95節の「世界像命題」にしても、「世界像を記述する命題があるとすれば」の意味で、接続法で書かれている。他方、100節では、「ムーアが、自分はこれこれのことを知っている、と語る真理は、おおよそ、もし彼が知っているのなら、我々全員が知っているようなものである。」と言われ、58節では、「私は知っている云々」が文法的命題とみなされる時、私は勿論重要ではない。」と指摘されている。ムーアが知っているか、ラッセルが知っているか、ウィトゲンシュタインが知っているかという問題ではないのである。この記述をみる限り、個人史レベルの話ではない、と理解可能である[7)]。

他方、個人史レベルの問題と解釈できる可能性も否定できない。例えば、269節では次のように言われている。即ち

自分がブルガリアにいたことが決してない、ということより以上に、自分は月にいたことがない、ということの方が、より確実なのか。何故そんなに自分は確かだというのか。そう、私はその近辺のどこにも、例えばバルカン半島には決していたことがない、と私は知っているからである。

このような話が、トルコ（332節）、中国（333節）、小アジア（419節）と繰り返される。中国に関する議論も同様に、中国国境近くまで行ったことがあるか否か、自分が生まれるころ両親が一時中国に滞在したことがないかどうか、この問題をクリアすれば、ヨーロッパ人は普通中国にいたことがあるかどうかを知っている、という形で進行する。

ヨーロッパ中心的な議論については、特に批判をしないままにしよう。より普遍的な形をとる議論と、個人史的な形をとる議論の混合した『確実性について』はどのような論点の集成であろうか。もとより、この書物はウィトゲンシュタインの最晩年のノートを編集したものである。しかも、1949年末から死の二日前の51年４月27日に亘って記さ

れたもののうち、半分以上を占める300節以後が51年３月10日以後の覚え書きである。その最終日の覚え書きの一節には次のように記されている。即ち

> 674節　ところで、私が間違っていることはあり得ない、と正当にいえるような特定のタイプの事例が存在する。そしてムーアはそのような事例の幾つかを与えている。
>
> 私は様々なタイプの事例を数え上げることはできるが、しかし一般的な特徴付けを与えることはできない。……

７．結びにかえて

一般的特徴付けを与えられないのは、事柄の本性によるのか、それとも癌による死を目前にしてウィトゲンシュタインの気力・体力が衰えてきているからなのか、そのいずれであろうか。一日前の26日には659節で、「私は今丁度昼ご飯を食べ終わったことに間違いはない。」という文が引かれ、その後のコメントで、食卓で眠りこけ、一時間後に目を覚まし、しかもそのことに気付いていないとすればどうか、と自問されている。その十日前には、「今の私はまるで老女のように哲学している。絶えず何かを置き忘れ、再び探さねばならないように。ある時はめがねを、ある時は鍵束を。」（532節）と嘆いている。

『確実性について』がどのような覚え書きであるかを明確にするためには、闘病の記録、という視点をも一つの重要な切り口として、検討する必要があるが、別稿にゆずることとする。ここでは、いわゆる「世界像命題」が、科学理論とは無関係 irrelevant であることを確認するにとどめざるを得ない。

注

１）この論文の当初の構想は科学基礎論学会年会の第１日目（平成15年６月14日　東北大学）で口頭発表された。この機会に寄せられたコメントに感謝したい。

２）日本での代表的な議論としては丹治信春『言語と認識のダイナミズム』（勁草書房）２．４節を参照。ウィトゲンシュタイン対クワイン、という脈絡以外でも『確実性の問題』は多くの論者が論じている書物である。最近のものでは、Rush Rhees, *Wittgenstein's On Certainty There－Like Our Life*, edited by D. Z. Phillips, Blackwell, 2003 が参照されるべきであろう。

３）前者は『最終草稿第１部』884節、後者は『心理学の哲学第１部』117節に由来する。*Nachlass*（未公刊の遺稿を含むデータベース、The Bergen Electronic Edition）で検索すると、前者の書き込みが1949年２月15日であることが確定する。後者については古いバージョンが MS130に見出され、これは1946年５月26日以後７月22日以前に記されたものである。

４）*Nachlass* で検索すると MS111, TS210, TS211に登場することがわかるが、それらの覚え書きからはさしたる考察を得ることはない。

5）潜水艦が第２次世界大戦で大きな役割を果たしていたことを思えば、ウィトゲンシュタインの想像力の乏しさに驚きを禁じ得ない。『断片』456節で H. G. ウェルズの名が登場するが、彼の SF にでも目を通していれば、と悔やまれてくる。ところで、公刊されたウィトゲンシュタインの著作で見る限り、月にいたことがあるか、という議論は『確実性について』に初めて登場し、676節のうち16の節で間歇的に論じられている。

6）さらに『青色本』（ブラックウェル版24―25ページ）の「基準」と「兆候」をめぐる議論まで遡ることは勿論可能である。

7）なお、84節も参照。

On Wittgenstein's 'World-Picture' in his *On Certainty*

Masahiro OKU

1. *On Certainty* (hereafter OC), a collection of Wittgenstein's remarks from his last one and a half years, has been variously discussed among philosophers. The most popular and attractive topic is the 'world-picture' or 'picture of the world'. In the philosophy of science, Wittgenstein's view associated with this idea is often compared with Quine's holism.
2. This paper intends to show that the comparison between the two philosophers is off the point, and discusses some other related problems.
3. The oft-used scheme 'Wittgenstein versus Quine' is based on the latter's viewpoint. Consequently, Wittgenstein's view was distorted when interpreted under this scheme. This claim is supported by the following two reasons. The first, more basic reason is that Quine's main books and papers had already been published and well read when OC was published in 1969. The second, more specific reason is that Wittgenstein's metaphor of 'river-bed' in ##96f. reminds the reader of Quine's holism as appears in his 'Two Dogmas of Empiricism.'
4. The truth is that the term 'world-picture' appears in only 7 out of the total 676 sections of OC. Moreover, these sections contain some naive mistakes in science, e.g. a misdescription of Lavoisier's achievement (#167), and the physical impossibility of space travel (#108). These sections do not deserve to be considered as presenting a possible theory of science.
5. In addition, almost all the ideas in OC are traceable to earlier remarks. To put it differently, very few, if any, ideas newly appear in OC.
6. In evaluating OC as a whole, there are some great difficulties. An example can be described with the following statement : "Wittgenstein has not been on the moon". This statement can be understood as describing a non-personal truth. On the other hand, "Wittgenstein has not flown by plane", "Wittgenstein has not been in China" should be understood as indicating personal or person-specific truths. It seems to me, however, that his stance on this point was wavering. In order to give a full assessment of OC, we have to scrutinize it in more detail, keeping also in mind his deteriorating conditions in the last two months of his life.